

平成28年9月23日

平成28年度文化庁映画賞（文化記録映画部門・映画功労部門）
の決定について

文化庁では、このたび、文化庁映画賞（文化記録映画部門・映画功労部門）の受賞作品及び受賞者を決定しましたのでお知らせします。

1. 表彰の概要

我が国の映画芸術の向上とその発展に資するため、文化庁映画賞として、優れた文化記録映画作品（文化記録映画部門）及び永年にわたり日本映画を支えてこられた方々（映画功労部門）に対する顕彰を実施しています。

文化記録映画部門では、選考委員会における審査結果に基づき、次の3作品（文化記録映画大賞1作品、文化記録映画優秀賞2作品）を受賞作品として決定しました。各作品の製作団体に対して、賞状及び賞金（文化記録映画大賞200万円、文化記録映画優秀賞100万円）が贈られます。

また、映画功労部門については次の9名の方を受賞者として決定し、文化庁長官から賞状が贈られます。

2. 受賞作品及び受賞者
【文化記録映画部門】

文化記録映画 大賞	作品名	氷の花火 山口小夜子
	製作者名	「氷の花火 山口小夜子」製作委員会
文化記録映画 優秀賞	作品名	さとにきたらええやん
	製作者名	ノンデライコ
	作品名	ふたりの桃源郷
	製作者名	山口放送

（作品名50音順）

【映画功労部門】

氏 名	分 野
安藤 清人（あんど う きよと）	映像照明
上野 昂志（うえの こうし）	映画評論
内田 健二（うちだ けんじ）	アニメーション製作
奥原 好幸（おくはら よしゆき）	映画編集
櫻井 勉（さくらい つとむ）	映画製作
多良 政司（たら まさし）	映画録音技術
中野 稔（なかの みのる）	特撮・映像視覚効果
森 卓也（もり たくや）	アニメーション映画評論
森田 清次（もりた せいじ）	アニメーション編集

（敬称略・氏名５０音順）

３．贈呈式及び受賞記念上映会（都合により、日時・場所の変更の可能性があります。）

（１）贈呈式

日程：１０月２５日（火）２０：３０～

会場：六本木ヒルズ グランドハイアット東京

（２）受賞記念上映会

日程：１０月３０日（日）１１：００～

会場：神楽座（飯田橋）

１１：００～ 『さとにきたらええやん』

１４：００～ 『ふたりの桃源郷』

１６：５０～ 『氷の花火 山口小夜子』

文化庁文化部芸術文化課

課 長 木 村 直 樹（内2822）

芸術文化調査官 入 江 良 郎（内2829）

メディア芸術振興係長 中 臺 正 明（内2083）

【代表】０３－５２５３－４１１１

平成28年度文化庁映画賞贈賞理由及び功績

【文化記録映画部門】

文化記録映画大賞

『氷の花火 山口小夜子』 「氷の花火 山口小夜子」製作委員会

世界中の人々に“東洋の神秘”と称賛されたモデルの山口小夜子が急逝して8年、残された遺品が母校・杉野学園で開封され、在りし日に関わった人たちが彼女について語る。遺品が息を吹き返すたびに山口小夜子という存在が今日的な意味をもって浮かび上がってくる。生前親交があった監督の追慕の念に発した本作は、彼女の表現者としての魅力に迫るとともに70年代から21世紀にかけてのファッション・舞踏界の優れた「時代の記録」ともなっている。

(中嶋 清美)

文化記録映画優秀賞

『さとにきたらええやん』 ノンデライコ

日雇い労働者の街、大阪市釜ヶ崎にある無料の児童施設「こどもの里」の日常を記録した作品。子供なら誰でも自由に出入りできる「里」には、さまざまな境遇の子が集まってくる。行き場のないかれらにとって、「里」は唯一の、息のつける逃げ場所であるかのようだ。映画はかれらの本音の言動や喜怒哀楽をじつに生き生きととらえており、同時に家庭環境の劣化や経済的貧困の恒常化、いじめや差別など、日本社会の今日的問題を浮かび上がらせるのにも成功している。

(奥村 賢)

文化記録映画優秀賞

『ふたりの桃源郷』 山口放送

電気も水道も電話も通っていない山口県岩国市の山奥で暮らす老夫婦の25年を追ったドキュメンタリー。この夫婦は山奥の暮らしをこよなく愛し、執着する。みるからに仲良しのこの夫婦、そして、本作品は家族の幸せを考えさせ、羨ましくもさせられる。夫妻は亡くなるが、見終わって温かい気持ちにさせる、地域と密着している地方テレビ局でこそできた優れたドキュメンタリー作品である。

(山名 泉)

※ () 内は執筆した選考委員名

【映画功労部門】

安藤 清人（あんど う きよと）

昭和 41 年大映京都撮影所に照明助手として入社。同 47 年には東映京都撮影所とフリー契約を結び、中山治雄、増田悦章ら東映の黄金期を代表する照明マンの元で研鑽を積む。『コータローまかりとおる！』（鈴木則文 昭 59）で一本立ちして以降『二代目はクリスチャン』（井筒和幸 昭 60）『極道の妻たち』（五社英雄 昭 61）などの話題作で手腕を発揮。『わが心の銀河鉄道 宮沢賢治物語』（大森一樹 平 8）『おもちゃ』（深作欣二 平 11）『長崎ぶらぶら節』（深町幸男 平 12）『千年の恋 ひかる源氏物語』（堀川とんこう 平 13）『天地明察』（滝田洋二郎 平 24）『利休にたずねよ』（田中光敏 平 25）『海難 1890』（田中光敏 平 27）で受賞した日本アカデミー賞優秀照明賞は計 7 回に及ぶ。和紙を用いたソフトな光は安藤照明の特長として知られる。日本映画テレビ照明協会の副会長、関西支部長を務め、技術スタッフの東西交流にも重要な役割を担ってきた。

上野 昂志（うえの こうし）

昭和 41 年『ガロ』に社会時評的コラム「目安箱」を連載して評論家デビュー。映画、文学、写真、美術、漫画、音楽など、幅広いジャンルで活発な批評活動を展開し、大衆文化の地位向上と、映画の文化的評価の向上に果たした功績は大きい。主な著書、編書に『沈黙の弾機 上野昂志評論集』（昭 46）『映画=反英雄たちの夢』（昭 58）『鈴木清順全映画』（昭 61）『肉体の時代 体験的 60 年代文化論』（平 1）『映画全文 1992～1997』（平 10）など。また、俳優や監督に較べ注目を集めることの少ない録音技師・橋本文雄に取材した『ええ音やないか 橋本文雄・録音技師一代』（平 8）、プロデューサー・伊地智啓に取材した『映画の荒野を走れ プロデューサー始末半世紀』（平 27）は、日本映画史の厚みを記録した貴重な取り組みである。日本ジャーナリスト専門学校の講師のちには校長を務め、後進の育成にも尽力した功績も高く評価される。

内田 健二（うちだ けんじ）

昭和 53 年日本サンライズ（現サンライズ）に入社。テレビアニメ「闘将ダイモス」（昭 53）の制作進行、「重戦機エルガイム」（昭 59）の制作デスクを経て、同 60 年に「機動戦士 Z ガンダム」のプロデューサーを務める。以後「ガンダム」シリーズを中心に、同社のアニメ作品を数多く手がける。劇場用アニメーションの代表作に『機動戦士ガンダム 逆襲のシャア』（富野由悠季 昭 63）『超劇場版ケロロ軍曹』（近藤信宏 平 18）『カラフル』（原恵一 平 22）『SHORT PEACE』（大友克洋 他 平 25）など。平成 20 年サンライズ代表取締役社長に就任。同 26 年代表取締役会長、同 26 年日本動画協会理事長、同 27 年アニメジャパン理事長を歴任。日本動画協会では、文化庁委託事業「若手アニメーター等人材育成事業」の実施運営にもあたるなど、業界のリーダーとして後進の育成及び分野の発展に多大な貢献をもたらした。

奥原 好幸（おくはら よしゆき）

昭和 49 年日活株式会社に入社以来、40 年以上にわたり編集の現場に従事してきた。平成 4 年には竹中直人（『無能の人』[平 3]）など新人や若手監督の個性を生かす絶妙な技術が評価され、初となる日本アカデミー賞優秀編集賞を受賞。その後も竹中組（『119』[平 6] 『東京日和』[平 9]）、相米慎二組（『お引越し』[平 5] 『あ、春』[平 10] 『風花』[平 13]）、崔洋一組（『月はどっちに出ている』[平 5] 『マークスの山』[平 7] 『血と骨』[平 16]）をはじめ、日本映画の第一線で手腕を発揮し、優秀編集賞の受賞は計 5 回に上る。その他の代表作には『ゴジラ 2000 ミレニアム』（大河原孝夫 平 11）『赤目四十八瀧心中未遂』（荒戸源次郎 平 15）『父と暮せば』（黒木和雄 平 16）など。同 24 年よりフリー。これらの業績に加え、永年にわたり日本映画・テレビ編集協会理事、日活芸術学院講師を務めるなど、分野への貢献は多大である。

櫻井 勉（さくらい つとむ）

昭和 44 年近代映画協会制作のテレビシリーズ「新藤兼人劇場」に製作進行として参加したのを振り出しに、数多くの日本映画で製作主任、製作担当、ラインプロデューサー、プロデューサーを担当して現在に至る。代表作には『婉という女』（今井正 昭 46）『讃歌』（新藤兼人 昭 47）『金環蝕』（山本薩夫 昭 50）『人間の証明』（佐藤純彌 昭 52）『居酒屋兆治』（降旗康男 昭 58）『乱』（黒澤明 昭 60）『雨あがる』（小泉堯史 平 12）『紙屋悦子の青春』（黒木和雄 平 18）など。永年にわたり映画製作の現場で縁の下を支える黒子に徹しながら、巨匠たちの困難な要望にも応え、限られた製作予算の中で現場の環境改善に努め、作家たちの創造性を最大限に発揮させるための努力をしてきた。和田倉和利、甘木モリオ、森賢正ら現在の日本映画をけん引するプロデューサーを育てるなど、後進の指導に力を注いだ功績も大きい。

多良 政司（たら まさし）

昭和 50 年東京映画映像部に入社。同 53 年より東宝録音センター、同 55 年より東宝映像美術、平成 17 年からは東宝スタジオサービスで、スタジオのポストプロ業務に従事してきた。ミキサー、スタジオエンジニア、サウンドデザイン、サウンドスーパーバイザーとして、数多くの作品を手がける一方、モノラルからステレオ、アナログからデジタルへと変遷する技術と機材の導入に指導的な役割を果たした。『連合艦隊』（昭 56）で日本初のドルビーステレオ音響制作に参加、『ゴジラ VS メカゴジラ』（平 5）で邦画初のドルビーデジタル版制作、『模倣犯』（平 14）では日本初の HD24P ダビングを手がける。同 22 年の東宝スタジオ新ポストプロダクションセンター建設ではダビングステージと機材の構築にあたった。日本映画・テレビ録音協会では永年にわたり理事を務め、映画録音技術の向上のため情報の公開と普及に努めるなど、分野への貢献は多大である。

中野 稔（なかの みのもる）

「特撮の神様」円谷英二に師事し、『孫悟空』（昭 34）『日本誕生』（昭 34）『モスラ』（昭 36）『キングコング対ゴジラ』（昭 37）など東宝映画の現場で合成技術を学ぶ。昭和 38 年円谷特技プロダクション（現円谷プロダクション）の設立を機に、光学撮影技師として「ウルトラ Q」（昭 41）「ウルトラマン」（昭 41）「ウルトラセブン」（昭 42）「怪奇大作戦」（昭 43）など空想特撮シリーズの合成画面を手掛けた。同 45 年飯塚定雄、高野宏一とデン・フィルムエフェクトを設立して独立。その後の代表作には、『日本沈没』（森谷司郎 昭 48）『宇宙からのメッセージ』（深作欣二 昭 53）『帝都物語』（実相寺昭雄 昭 63）『まあだだよ』（黒澤明 平 5）など。平成 6 年にはシネマディクトを設立。代々木アニメーション学院、日活芸術学院で講師を務め、若手の育成に尽力してきた功績も評価される。

森 卓也（もり たくや）

昭和 30 年代に市役所への勤務の傍ら執筆活動を始め、同 33 年には『映画評論』で映画評を発表。同誌に執筆した「動画映画の系譜」が注目を集める。特に、戦後ディズニーをはじめとする海外アニメーションが流入し、国産アニメーションの製作が本格化していくなか、いち早くこれらの研究に着目した一人として、数々の先駆的な書物を著した。代表的な著作に『アニメーション入門』（昭 41）『アニメーションのギャグ世界』（昭 53）『シネマ博物誌 エノケンからキートンまで』（昭 62）『アラウンド・ザ・ムービー』（平 1）『映画 この話したっけ』（平 10）『映画そして落語』（平 13）『定本アニメーションのギャグ世界』（平 21）など。30 年間にわたる新聞の連載をまとめた『森卓也のコラム・クロニクル 1979-2009』が今年刊行された。愛好家のみならずクリエイターや後進の研究者たちにも大きな影響を与え、落語、芝居まで幅広い分野をカバーする執筆を通して、芸能文化全般の普及啓蒙に寄与した功績も高く評価される。

森田 清次（もりた せいじ）

昭和 46 年より日放で勤務の後、同 48 年竜の子プロダクション入社。同 50 年フリーの編集マンとして独立。同 61 年森田編集室を設立、現在に至る。「けろっこデメタン」（昭 48）「昆虫物語 新みなしごハッチ」（昭 49）など竜の子プロ初期作品から「機動警察パトレイバー」（平 1）「機動戦士ガンダム SEED」（平 14）まで、数多くのテレビアニメの編集を担当し、永年にわたり第一線で活躍を続けてきた。特に平成 23 年に他界した山崎統氏との関わりが深く、代表作「ブラック・ジャック」（平 5～）は高い評価を受けている。劇場公開作品には『ドラえもん のび太の恐竜』（福富博 昭 55）『天使のたまご』（押井守 昭 60）『ぼくの孫悟空』（杉野昭夫、吉村文宏 平 15）『劇場版 NARUTO -ナルト- 疾風伝 絆』（亀垣一 平 20）など。作品の演出意図を明確に受け止め、コマ単位を見極めるきめ細やかな技術でキャラクターやシーンの雰囲気や醸成しながら、作品に生命を吹き込む手腕は高く評価されている。

<参考>

平成28年度文化庁映画賞選考委員

【文化記録映画部門】

奥村賢	いわき明星大学教養学部教授
谷川建司	早稲田大学政治経済学術院客員教授
戸田桂太	武蔵大学名誉教授
中嶋清美	公益社団法人映像文化製作者連盟事務局長
濱崎好治	公益財団法人川崎市生涯学習財団川崎市市民ミュージアム学芸室学芸員主査
山内隆治	東京大学客員研究員
山名泉	すかがわ国際短編映画祭実行委員

【映画功労部門】

青木眞弥	株式会社キネマ旬報社 キネマ旬報編集部部長
金勝浩一	映画映像美術監督／協同組合日本映画・テレビ美術監督協会副理事長
小出正志	東京造形大学教授／日本アニメーション学会学長
佐々木原保志	協同組合日本映画撮影監督協会副理事長／大阪芸術大学映像学科教授
土川勉	S K I Pシティ国際Dシネマ映画祭ディレクター

(敬称略・氏名 50 音順)